HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	タシュケント在住の一ウイグル知識人の歴史的記憶 : 社会変動と越境
Author(s)	新免, 康; 塩谷, 哲史
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 25-26
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88353
Type	article
File Information	JB014_003shinmen-shioya.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

公開講演

タシュケント在住の一ウイグル知識人の歴史的記憶
── 社会変動と越境 ──

新免 康*・塩谷 哲史**

本報告では、ウズベキスタン在住のウイグル知識人アマンベク・ジャリロフ氏に対する聞き取り調査に基づき、同氏の先祖に関する歴史的記憶と自らの歴史的経験･見聞に関するデータの概要を提示した上で、とくに中国領－ロシア帝国領・ソ連領の間で行われた「越境」の背景について検討した。その際、近現代における中央ユーラシアの政治的・社会的変動の文脈における新疆と中央アジアとの関係性に注目した。

アマンベク氏は1936年に新疆のグルジャ（伊寧）市で生まれた。その高祖父であるジャリルはイリ地域の出身で、ジャリル・ユズのユズ・バシであった。ジャリルの息子である曾祖父ブシュルベクは、1864年に発生したイリ地域のムスリム反乱に参加したと伝えられる。その息子である祖父ジャマールッディンは、1881年のサンクト・ペテルブルグ条約によるロシアから清朝へのイリ地域返還にともない、イリからロシア領セミレチエ地域に多数のムスリム住民が移住した際、アルマトゥの近くに移住して商売に従事した。息子のフサインベクは、アルマトゥのロシア学校で教育を受けたという。ジャマールッディンはロシア革命にともなう内戦期の混乱の中、1918年に息子たちとともにグルジャに移住した。フサインベクはグルジャ市内で金銀の取引に関係する仕事に従事した。以上のような父祖たちの歩んだ軌跡には、イリ地域－セミレチエ地域間における越境移動の実態の一端が反映されている。

グルジャで生まれ育ったアマンベク氏は、当地の近代的な初等・中等学校教育を受けた。そこで注目されるのは、この学校時代に中央アジア出身のウイグル人教師から影響を受けるとともに、タシュケントやアルマトゥで出版されたウイグル語定期刊行物や翻訳文学に親しんだという経験が、氏の知的背景の形成に一定の意味を持ったと推察されることである。他方、氏のグルジャでの学校時代は、1944年のイリを中心とした「三区革命」の勃発、そして1949年の中華人民共和国の成立、という大きな政治的変動の時期に当たっている。しかし、氏の受けた学校教育の内容について言えば、三区革命期におけるイスラーム関連科目の導入などを除き、少なくともグルジャにおいて顕著な変化はなかったという。グルジャでの中等学校卒業後、アマンベク氏は1952年にウルムチの新疆学院に入学してウイグル言語・文学

部で学び、卒業後の 1954 年 9 月から 55 年 8 月までウルムチの第二師範学校で教鞭をとった。

しかし、1955 年夏に大きな転機が訪れる。家族とともにソ連領に移住したのである。家族はアルマトゥにとどまり、氏は単身でタシュケントに来て、ニザーミー名称教育大学を受験し合格した。家族も時を経ずにタシュケントに移住してきたという。そして 1960 年大学を卒業すると、氏のアラビア文字表記ウイグル語の運用能力とウイグル文学の素養を認めた同大学教員で、科学アカデミー東洋学研究所の研究員であった人物の推薦で、同研究所に助手（laborant）として入所した。そして指導教員であったムハンマドジャン・ヨルダシェフの勧めで、ヒヴァ・ハン文書に基づくカラカルパク民族史の研究に従事してきた。タシュケント移住の理由として、1）スターリンが没する（1953 年）直前に中国領への移住者に対するソ連への帰還許可が出たこと、2）新疆農村部を中心に三反五反運動が始まり、「富農」に当たる父や自分の家族が標的になる可能性があったこと、3）ソ連への留学は当時新疆の若者たちの間で憧れだったこと、4）ソ連が作製したウズベク映画などを通じて、ムスリムとしての生活規範（飲酒の習慣がないことや服装など）が守られていたタシュケントの暮らしに親しみを感じていたことを挙げている。漢族に対する反感もあったが、それはむしろ氏がソ連国籍を持っていたことから、北京留学や新民主主義青年団への加入が認められず差別を受けたと感じたことに起因していたようである。1968 年にタシュケント在住のウイグル人女性と結婚し、1 男 2 女をもうけ、現在に至っている。

氏の語りは一種のサクセスストーリーをなしている。しかしそうした語りからも、内戦期の社会混乱、中ソ両国の社会主義社会建設期の変動に翻弄されたという話はうかがえなかった。むしろそうした変動を前に、早い段階での移住の決断が、移住後の生活の成功に結びついていた。またロシア帝国領・ソ連領の中央アジアと中国の新疆におけるテュルク系ムスリムの社会としての共通性、双方に社会的需要のある職能、氏の人間関係（親族ネットワーク、家族の職業仲間、幼いころソ連出身の教師たちに囲まれて教育を受けた経験）などが、越境移住を容易にしていたことも事実であろう。さらに氏の語りからは、ソ連の物質的近代化の進展や民族文化政策の成功の一端を知ることができるとともに、氏が身につけていたウイグル文学の素養がタシュケントでの社会的立場の確立につながったこともうかがえた。

（中央大学文学部*）
（筑波大学人文社会系**）